

## 研究室のホープ

吉松 康裕さん

東京薬科大学 大学院生命科学研究所  
腫瘍医科学研究室  
特別研究員

### ハードワークの先に、ふと出会える “偶然の発見”が研究の醍醐味です

吉松さんは佐賀県出身。山も海も近く、常に生き物と触れ合える環境に育った。小学校の自由研究では様々な植物の水分吸収を定量的に調べ、学校代表として発表。中学・高校時代には環境浄化に有用な微生物に興味を持ち、東京大学農学部では放線菌が作り出す抗生物質の機能について研究を行った。修士修了後に渡米し、細胞分裂の阻害をテーマとするラボを渡り歩く。

帰国後、再び東大に戻り、癌研究を牽引している宮園研究室にて、腫瘍微小環境における血管・リンパ管、癌間質形成メカニズムをテーマとする渡部グループに配属。昨年にはリンパ管形成の阻害因子を発見、その成果が米国科学アカデミー紀要(PNAS)に掲載された。今年4月からは東京薬科大学で腫瘍医科学研究室の新規プロジェクトの立ち上げに携わりつつ、内皮間葉移行(EndMT)による癌間質形成機構の解明に挑んでいる。「今後も、リンパ管とEndMTの二本立てで癌研究に取り組みたい。リンパ管については、発生

学的なアプローチで癌転移のメカニズムのヒントが見出せないかとも考えています」。

現在は研究の他にも学部4年生12人に実験の基礎を指導している。取りこぼしなく学生全員に目を配るのは大変だが、学生同士でもお互いに教え合うなどとても良い環境が築けているという。「研究を続けていくと、偶然の発見がそれまでの常識を覆す、という幸福な体験がきっとある。セレンディピティを得るために必要なのは自由な発想です」。興味の赴くままにフィールドを広げていく吉松さんのしなやかさは、研究者にとっては最大の武器に違いない。忙しい日々の息抜きは、3歳になる娘さんと動物園やプールに出かけること。ちなみに娘さんも、吉松さんと同じく動物好きだそうだ。



### 腫瘍医科学研究室

東京薬科大学 生命科学部

癌研究を行うラボは数多いが、同研究室の特徴は、癌細胞の増殖を促している血管、リンパ管や癌間質といった腫瘍微小環境に着目している点だ。腫瘍微小環境は、いわば癌細胞を主とする城。血管・リンパ管や癌間質の形成メカニズムを明らかにし、“城攻め”の方法を探る、多角的な治療法の開発を目指している。研究室では、配属された学部4年生に、実験の基礎から科研費申請書の書き方まで、半年かけて研究者としての基礎トレーニングを行うシステムを導入。今年度は12人の学部生を迎え、フレッシュな活気に満ちている。「研究者として生き残るためには、しっかりした研究技術の習得に加えて、論理的に考えて表現できることが大事です。若い日の尖った気持ちを、いつまでも忘れずに現状を変えていってほしいですね」と渡部教授。温かな指導の下、ここからどんな研究者が巣立っていくのだろうか。



渡部 徹郎 教授



研究室の皆さん